慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 利子説明の基礎に関するボエム・バヴエルクとクラークとの論争（下） |
| Sub Title | |
| Author | 金原, 賢之助 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1921 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.9 (1921. 9) ,p.1328(116)- 1345(133) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 雑録 |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210901-0116 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 利子說明の基礎に關するボエム・バヴエルクとクラークとの論爭（下）

金原賢之助

## 三

茲に於て Clark は更に利子問題より論じて資本概念に關する彼の見解を明瞭ならしめんとせり。即曰く「資本は、普通實際上の意味に於て生產に用ひられたる富の永續的元本なり。而して社會的資本の物質的組織は生物體の實質の如くに絕へざる變化を蒙るものなれども、生產的元本は全體として其同一性を保つものと言はざるを得ず。成功的の實業家は彼の資本を保持す。されど成功の爲には彼は常に資本財を手離さゝる可らず。茲に於て吾人は其永續的元本を研究するか、將又其消滅する構成要素のみを研究す可きものなりや。資本財の研究せらるゝ場合には、（資本財は消滅する構成要素として活動の始と終とを有するを以て）之等の期間は考察さるべき要素として觀察に入り來るなり。Böhm-Bawerk 教授の學說に於ては、彼等は、資本よりの所得が依て以て其基礎とする根本的の事實なり。利子は、斯る期間の終りに於て利用さるゝ所の財と比較して、其期間の始に於て利用さるゝ所の財に對する打歩なり。彼は吾人に利子に關する人を魅するが如き Time discount theory を與へたるなり。而して其期間は生產の用具（instruments）の經濟的行程によりて決定せらるゝなり。」（Clark, "The Origin of Interest," quar. Jour. of Eco., vol. IX, pp. 257-8）

然るに Clark は直ちに Time discount theory に讃意を表するものにあらず「然らば(1)一方に於ては唯具體的用具のみを研究する所の學說が存するなり。其は、其具體的用具の活動が決定する所の期間を測定し、利子を斯くして測定せられたる夫々の時の間隔に歸因する打歩に歸着せしむるなり。(2)他方には又、之等の用具と彼等の性質とを認別し、併し限りなく連續する用具が構成する所のかの永續的資本の研究に根本的地位を與ふる學說あり。其は利子問題を其元本（fund）と云ふ語を以て說明するものにして、利子を其元本が年々創造する所のものゝ一部分たらしむるなり。其は a productivity theory にして生產の各別の期間を從屬的地位に押込むるものなり。而して其が意味する所は、具體的資本財の研究は其が永續的資本の研究となるに非れば完全なるを得ずと云ふことなり。余は亦其は利子の生產力說を生ずるものなることを主張するなり。」（Ibid, pp. 258-9）云々と述べて以て茲に二種の學說あり、而も彼は後者即生產力說なるものに屬することを明かにせり。更に彼は語を次いで前者の學說に對して手痛き攻擊を加ふるの準備を爲せり。曰く「Böhm-Bawerk」教授の分析の中に表はるゝ生產期間は、社會に慾望を滿足せしめんが爲に斯る期間の間待たざる可らざる人が在るに非れば、彼が其生產期間に與へたる重要を得ること能はざるなり。若し萬一にも或人々の階級ありて其人々は、或生產用具の壽命によりて表はされたる期間の始に立ち其期間の終りを希望し、而して彼等の慾望が產業の自然の經過の中に其終に於て滿足せしめられ得ることを知りたるものとして正しく表はされ得るならば、然る時には此期待の期間（interval of waiting）によりて或負擔を課せらるゝ所の一階級が存在するものと云ふを得べし。若しも彼

等が、彼等の勤勞の生產物の成熟する爲に其時期を待ちしならば、彼等は遲延の負擔を感ぜしめらる可し。彼等は時間の犧牲(a time sacrifice)と稱せらるゝものを蒙る可し。若し彼等が此犧牲を自身にて受くるを得ずとするならば、而して其れ故彼等が他人をして彼等に代りて其れを引受けしめて其れを避けたりとするも、其期間を待つの負擔は尙ほ或何人かによりて行はれざる可らざるべし。社會的生產者の或階級は、報酬が有るならば、慾望と滿足との間に時の間隔を置くべく。Böhm-Bawerk 敎授の研究に於ては、貸付利子 (loan interest) は之に對する報酬なり。其は人に代りて待つことに對して支拂はるゝ報酬なり。」(Ibid. p. 259)

斯くして Clark は萬一にも右の如き期間を待つ人があるならば、其處に time sacrifice が生じ之に對して報酬が支拂はるべく、此報酬こそ Böhm-Bawerk の所謂利子なることを明かにせり。然らば彼は斯る人々の存在することを認めしか或は time sacrifice の存することを確信せしや。否決して然らず「time sacrifice 或は單に或物を待つことによりて受くる犧牲が利子の基礎に存するならば、其は靜的狀態の下に蒙る可きものならざる可らず。若しも前記の期間が利子の裏面に存する所の time sacrifice を生ずるならば、之等の夫々の期間を待ち居ると云ふことは靜的產業に於ける根本的事實ならざる可らず。斯る期間の始に於て事物を持ちたる實際の人が何處にか居らざる可らず。期間の終に於て彼等を得る所の人が居らざる可らず。又之を待つ爲に報酬を要求し取得する所の人が何處にか居らざる可らず。然るに社會の何處にも吾人は其を蒙る人を見出さず。各人は今日の勞作の結果として完成したる財を今日取得す。勞働する人は斯る待つと云ふことを自身にて爲さず。又其代理人によりても爲さず。利子は產業が進行し而して資本の產物が創造せらるゝに從ひて、賃銀の如くに日々生ずるなり。資本家は其の利用の爲に欲する完成したる財を、彼の資本が實際に彼等を造るに從つて取得す。生產と其報酬とは同時に發生するものなり」(Ibid p. 260) と time sacrifice なるものゝ存在を全然否定せり。

然れども「新しき資本を創造すると云ふことは利子の獲得せらるゝ過程の一部にはあらず。新しき資本を造る爲に必要なる凡ては、現在の資本が適當に利用さるゝと云ふことなり。數代の間何人も彼に手渡せられたる資本を損せずに保存する以上の事を爲さずと云ふことは想像され得可し。其場合には何等眞の節約(abstinence)は行はれざるなり。若しも永續的資本が一度創造さるゝならば、其れより生ずる所得は其れ以上如何なる種類の time sacrifice もなく享受せらるゝなり。」從ひて「何人も所謂生產期間の終り迄彼の所得を待つものなきを以て、生產期間に關係して此現在及將來の財を比較すると云ふことは全く爲さるゝの必要なしと余は主張せるが、其比較することは唯新しき資本の創造に關してのみ爲さるゝなり。富を消費するよりも寧ろ貯蓄せんと決定するに際しては、資本家は限りなく連續する利子の增大を期待し而して其增大に主觀的價値を置くなり。」即資本の職能を說くに當りて一の例外を設け、靜的狀態に於ては資本は勤勞と其效果とを同時に發生せしむれども動的狀態即新しく資本の造らるゝ場合には然らずと爲したる彼は、利子に於ても同樣の讓步を爲したるなり。是 Böhm-Bawerk が Clark の說の一大弱點となす所なり。然れども「利子の增大が資本家に齎らす所の享樂の種類は他の要

素なり。而して實際彼等（利子の增加）は節慾によりて拋棄せらるゝ其れ等とは全く異れる享樂を齎らすなり。人は現在の財を將來の財と比較せざるなり。

若しも資本を貯蓄する人が或快樂を拋棄して而して或將來の時に於て同種の快樂を得るならば、其時には遲滯の結果は彼の計算に從つて區別せられ測定せらる。されど資本を蓄積する人は其れを爲さず。何となれば彼は或享樂を拋棄して他のものを獲得するものなればなり。靜的狀態に於ては如何なる消費者も將來の財の現在の價値を少しも測定せず。何となれば其狀態にては何等 abstinence 存在せざればなり。

若しも研究の目的が單なる要素即 time を區別するにあるならば、現在の千弗と將來と千弗との比較は固有的に件の目的を達するに不可能なりと余は主張せんとす。何となれば現在に於ける此金額は或物を買ひ而して其後に於ては其同一金額は其れと異りたるものを買ふ可ければなり。現在が將來より以上に有する優越は、唯時の經過のみが考慮せられし場合にあるべき優越にあらず。若し幾何の資本を貯蓄すべきかを決定する場合に於て、資本家の將來の一考察が其資本の額を決定し其れによりて利子の率に影響するの效果を有するならば、其率は、資本家が種類に於ても額に於ても同一の個人の所得を比較せる場合に在るべき率と同じからず。利子は、數學的の事實として、單なる遲滯(delay)によりて蒙る犧牲に對する之と等價の代償物には非るなり。」(Ibid pp. 260-263)

## 四

斯くして Clark は眞の資本家なるものは決して現在の財と同種同量の將來の財とを比較するものにあらず。從つて利子其ものは單なる時の經過によりて生ずるものとは異る所以を再述して Böhm-Bawerk の意見に反對を表明せり。唯彼は「資本家の行動の性質」に關しては Böhm-Bawerk と全く一致せる意見を抱懷せる旨を述べたり。而も尙ほ彼は資本家は同種同量の現在及將來の財を比較す、何となれば彼は現在の dollars を將來の dollars と比較するものなればなり」と云ふ Böhm-Bawerk の formula に對しては幾多の首肯し難き點を有せるものにして、今茲に其點を詳述すれば次の三點となすを得可し。

（一）「余の意見に於ては彼の法式は、貨幣を測定せらる可きものとして用ふることによりて、救はれざるなり。測定せらる可きものは主觀的價値なり。而して貨幣其物に於ては全く其性質を有せず。實際資本家は貨幣と密接に關係せる所の主觀的價値を測定するなり。主觀的價値は貨幣が買ふ所の財の中に存す。而して吾人が之等の財を用ふる瞬間に吾人は評價の爲に更に異れる貨物を持てるなり。

（二）所得を貯蓄する人は現在に於ける貨幣の用 (use) を拋棄するものにあらず。彼は所得を其形體(即貨幣)に於て取得し、其れを消費者の財に對してよりは寧ろ資本財に對して費すなり。彼は、購入せしやも知れざる所の金剛石の主觀的價値を評價し、次に彼の生じ來れる利子を以て買入るゝべき限なく連續する小石其他の物の現在の主觀的價値を計算す。彼は現在の貨幣を消費するの異りたる方法によりて得らるゝ二個の異りたる主觀的價値を比較す。現在と將來の貨幣を比較することは――若し吾人が其が財を意味するものと其言葉(貨幣)を解釋せざるならば――全く主觀的價値を比較することにあらず。若しも吾人が其言葉を財を意味するもの

とすれば、吾人は相異れる財を比較し而して單なる將來の時の結果を測定するに止まるに至るものなり。（斯くして吾人は、Böhm-Bawerk は貨幣の比較なりと主張し、之に對して Clark は主觀的價値の比較なりと反駁せるを知ることを得るなり。若しも前者の貨幣が財を意味せずとすれば、其は Clark の言ふが如くに主觀的價値の比較にあらず。若し其が財を意味したりとするも尙ほ後者の說とは異るなり。何となれば後者は相異れる財を比較すと爲すに反して前者は同種同量の財を比較すとなすものなればなり。）

（三）　現在及將來の貨幣の額を比較するに際しては、吾人は實際には、余が現在及將來の富の額或は分量（"sums" or "quantities of wealth"）と稱するものを比較しつゝあるなり。余に對する批評家は、之等の言葉は曖昧なるものとして反對し而して次の意見を有す。即彼等を定義する場合に、余は同種同量の財に關する彼の法式を採るか、或は其言葉に誤謬の意味を與ふるかの何れかに餘儀なくさるべしと。然れども余は次の意見を提出す。資本家が主觀的價値を測定する目的の爲に現在の貨幣の額と將來の同じ額とを比較すと云ふ場合に、彼は、其人が眞に評價する所のものは（貨幣其ものには非らずして）貨幣にて測り得る同分量の富なることを認むべし。（其れ故）彼の法式の「貨幣」は金の富の額（sums of wealth）なり。吾人は資本家は現在及將來の金錢上の價値（pecuniary values）を比較すと云ふことを得可し。比較せらるべきものは、今得らるべき何物かの dollar の價値及今後に於て得らるべき何物かの dollar の價値なり。」（Ibid pp. 263-264）されば Clark の說により Böhm-Bawerk の貨幣は彼の富の額となれり。然らば富の額は財と同じきものなりや。果して同じならば（二）の最後に余の附記せし非難を蒙ることなきかは吾人の茲に疑問とする所なり。

されど斯くの如き見地より出發したる彼は徹頭徹尾 Böhm-Bawerk と反對の學說を抱懷し「若しも法人が其資本を百萬弗より成るものと報告するならば、其意味する所は永久的の所有として生產者の富の百萬弗の價値を有すと云ふことなり。此額を構成する所の資本財は其本體を永久に變しつゝあるものなれども、百萬弗の金額は存續するものなり。捕鯨船は之を紡績棉と爲すを得ず。然れども資本は實際ニュー・イングランドの捕鯨業より綿絲紡績業に移動せられたるなり。可動性（mobility）は余の取扱へる資本の屬性なり。人は一產業より貨幣を引出して他の產業に投資することを得。利子は此永續的可動的貨幣よりの年々の所得なり。或は一層正確に云ふ時は、資本財に變化し得る此貨幣上の價値よりの年々の所得なり。」（Ibid pp. 264-265）云々と自己の見解を開陳せり。

## 五

以上の如き駁論に對して Böhm-Bawerk は同じく The Origin of Interest と題する論說を起草して直ちに辯駁するの擧に出でたり。姑く彼の辯ずる所を窺はんに

（一）「Clark 敎授は、余が前論文に於て現在財と將來財との間の價値の相違を表はす財の一種として貨幣を擧げて、貨幣の例を始めて其問題中に入れたりと、斷定せしが如く思はる。此は誤解なり。何となれば余は、Positive Theory of Capital の多くの且或最も重要なる章句に於て、現在財が將來財よりも價値多しと云ふ命題の例として貨幣を用ひたればなり。（此點に關しては實際彼は其著の p. 249 に於て「將來の shilling と比較したる現在の shilling」云々と云

ふ文句を用ひたり。其他 pp. 250, 251, 255, 256 etc. 參照、併し Böhm-Bawerk は Clark が貨幣の場合を始めて用ひたる旨を述べたりと言ふと雖も、Clark 自身は斯る "for the first time" と云ふが如き重要なる言葉は彼の論文には見えずと言ふ。又 "introduced" と云ふ言葉は「其言葉が以前には用ひられざりき」と云ふが如き特別の意味に用ひられしには非らずして、Positive Theory of Capital 中の議論中に用ひられ而して再び上記の論文にも用ひられたりと言ふのみと。）

（二）「Clark 教授は余の利子學說を Abstinence Theory の一種と觀察せられしが如し。彼は、余の利子學說の關せる範圍に於ては生產期間は重要なり、何となれば『社會には其慾望を滿足せしめんが爲斯る期間の間待たざる可らざる人々あればなり』と、信じ居るなり。此慾望滿足の爲に待つと云ふこと即一時の不自由を忍ぶと云ふことを彼は "time sacrifice" と稱し、而して余の學說に於て余は利子を此 sacrifice に對する支拂或は賠償と爲すと信じ居るなり。彼は社會の靜的狀態に於ては、利子の獲得ありと雖、何人も斯る犧牲を爲さず又何等眞の節慾も行はれずと云ふ反對を、余に對して主張したり。實に余の學說に對する全部の誤解は右の概念に存するなり。」Clark の攻擊は全く斯る誤りたる解釋の上に基けるものなることを答へ、以て彼は自著に付きて、斯る解釋とは反對の意見を論述せしことを詳細に立證する所ありたり。即「余は Capital and Interest, Bk. IV pp. 269-293 に於て、全章を利子は資本家の側に於ける節慾に對する報酬なりと云ふ思想に反對する爲に捧げたり。Positive Theory の P.363 に於て余は明かに、『非常に濫用せられたる表語』即 "Reward of abstinence" によりて利子の存在は理論的に說明せらるゝを得ずと述べたり。又『何人も如何に多くの利子が、報酬を受くるに足る節慾なくして、單純に收納せらるゝかを知れり』『一般に資本家は、彼等の現在の財を生產的に貸附け又は投資する場合に、何等個人的の奢侈を愼む譯に非らず。何となれば、彼等は斯る投資の機會なき場合にすらも現在に於ける彼等の資本の蓄積を消費せざる可し。如何なる場合に於ても將來に於ける彼等自身に備える爲に其を保存すべし。換言すれば、彼等にとりて現在財の主觀的使用價値は將來財の其れより大ならざればなり』(pp. 315, 330, 375) と述べたるなり。」

「之に反して、或る效果ある生產方法は time-robbing（時間の奪略）なり、或は彼等は吾人に一層多き且一層善き消費財を唯將來の時に於てのみ與へるなりと云ふ意味に於て、時間の犧牲 (a sacrifice of time) を要求するものなりと云ふ客觀的事實に基けるが余の說なり。(p. 82) Time-robbing なる間接の生產方法は勿論人が其期間に對して完成されたる現在財の用意がある場合にのみ、用ひらるゝことを得。(即人が其期間內に於て不自由を感ぜざる程に其終りに迄用意のある場合) 斯くして現在財を自由に處分し得ることは、生產上に一層有利なる方法を用ふるの一條件となるなり。從つて現在の財に對する活動的なる强烈なる需要を生ずべし。而して其財の供給は常に制限さるゝを以て、遂に彼等に對して agio（打步）を生ず即利子を生ず。此說明に於ては、何人か現在の慾望を充足せしめざる爲に苦痛を感ずとか、或は何人か苦痛なる abstinence を行ふと云ふことは、何處にも前提とはされ居らざるなり。又其何處に於ても、利子は資本家若しくは其他の者の受けたる特別の個人的の犧牲に對する賠償として、說明せられしこ

となし。否却て其は資本家が手に有せる "present goods" と云ふ貨物は "future goods" と云ふ貨物より大なる價値を有すと云ふ客觀的事實の結果として說明せらるゝなり。」(Böhm-Bawerk, The Origin of Interest, Quar. Jour. of Eco., vol. IX pp. 380-384)

利子は靜的所得にして其起源を靜的原因に有すと云ふこと及新しく資本を造り出すことは利子の得らるゝ經過の一部にあらずと云ふことに於ては、Böhm-Bawerk は Clark の意見に全く一致すと云ふ。而して彼は、資本が害せられずして單に保存せらるゝ場合には何等眞の abstinence は行はれずと云ふ Clark の主意を、或意味に於て眞實として認む。然れども Clark が斯る實例より彼に對する駁論を演釋する場合には、彼は『此は利子の說明に abstinence を用ふる說に反對する議論たり得れども、余の說に反對するものにあらず』と答へんと。

以上述ぶるが如く、Clark の非難は全く Abstinence Theory を採る者に對して加へらるべきものにして、Abstinence Theory を固執せざるのみならず之に對して十分なる反對を表明したる彼の受くべき筋合にあらずと主張したれども、其は亦 Clark に依れば Böhm-Bawerk の誤解なり。Clark の云ふ所によれば、彼は決して Böhm-Bawerk を、「資本家は生產期間の間缺乏は空腹を感ず」と主張する者と、姑くも思惟せしことなし。「余は次の如く了解せり Böhm-Bawerk 敎授の學說に於ては、資本家は勞働者を斯る期間の間缺乏と空腹を免れしむるものとなされ居ると。資本家は或點に於て彼自身の直接の滿足を侵すことなくして之を爲すこと能はずと云ふが余の主張なり。資本家が勞働者を援助するに非れば、所謂生產期間は勞働者をして消費財を得る爲に待たしむるの力を有するものならば、然る時資本家は、若し彼が斯く彼等勞働者を援助するならば、或るものを得る爲に待たざる可らず。生產期間が斯る待つと云ふことを含むと云ふ說は、余が Böhm-Bawerk 敎授に歸したるものなり。

若しも吾人が資本家を、一定種類の具體的消費財を所有するものと、考ふるならば、又彼は恐らく一度に使用するを得ざる程豐富に所有するものと考ふるならば、彼は其或るものを自身に於ては何等の abstinence もなく勞働者に引渡すを得べし。若し吾人が彼を一定種類の利用し得べき財を有せず、種類に於いて不定の富を所有するものと考ふるならば、吾人は彼をして此富の如何なるものも abstinence なくして前貸しせしむるを得ざるべし。彼は暫時の間彼自身の限りなき慾望を制せざるべからざるべし。

人に代りて待つと云ふこと (vicarious waiting) は、其が少しにてもなさるゝならば、abstinence を含まざるを得ずと云ふが余の議論なり。而して斯る待つと云ふことが——其が資本家には何程かの費用を要するか否かの問題と離れて——行はると云ふ見解が、余が Böhm-Bawerk 敎授に歸する所なり。資本家が、彼の撰ぶ如何なる形式に於ても占有し得る富の中より、勞働者に前渡しするならば、彼は自身或現在の費用を負擔して其れを爲さゞる可らずと云ふ見解が、余の思想より離るゝ能はざるものなり。而して此點に關する大部分の記述に於て、vicarious waiting と vicarious abstaining との間に區別を爲すの必要を認めざるなり」(Clark, "Real Issues concerning Interest," Quar. Jour. of Eco., vol. X, pp. 99-100) 云々と。併し彼が特に主張せんとする總ての點は『實際 waiting 或 abstinence はとする總ての點は『實際 waiting 或 abstinence は

何處に起るか』の問題にして Clark に依れば其は新資本を造ると云ふ行爲に集中せらるゝなり。

以上述ぶる所を以て觀れば彼等は互に駁論に對して更に反駁をなし爲に循環に陷れるの觀あるなり。

## 六

Böhm-Bawerk は Clark を始めとし General Walker, White, Bilgram, Macvane, Hawley 等數多の人々と論爭し又讃否の批評を受けしこと枚擧に遑あらず。中にも彼の利子論に對して別の方面よりも痛き攻擊を加へし者は Otto Conrad 其人なりとす。Conrad は Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik に於て述べて曰くBöhm-Bawerk の利子論々述の方法は、先づ價値算當の理論を以て補充財の價値を定め、之より生產財の價値に對き而して生產財の代價を導き出さんとするに在るものにして、其利子の理論は何故に生產財の代價が生產物の代價より低きかの問に答へざる可らざるものなるが、ボエ氏は即其說明を現在財と將來財との間に於ける價値の差に求め、『現在財と將來財との間に存する自然的價値の差こそ資本利子の發生を來す根源なれ。』將來財たる生產財は現在に消費し得べき享樂財よりも其價値小なり。此價値の相違は代價の相違に對應す。故に生產財の代價は之より生ずる生產物の代價より小なりと說明したり」。—op. cit. Folge III, Bd. 46, Hebt. 3, Sept. 1913 本誌第八卷第一號增井幸雄氏抄譯五四—五五頁に據る）彼は先づ Böhm-Bawerk の利子理論の方法を論述し、次に其が彼の主張に沿はざる旨を述べ「依是見れば、ボエ氏は吾人が先きに述べたると反對の方面より利子問題の解決を企てたるものなり。說明すべきものは生產物の代價と費用即生產財の代價との差に外ならざるが、氏は何故に生產物の代價が費用以上に在るやを問はずして、何故に費用は生產物の代價以下に在るやを問へり。されど余は氏が生產物と生產財との價値の差よりして利子を說明せんとしたるは全く誤れるものなりと思惟す。其理由は簡單なり。曰く生產財の代價の基礎となるべき生產財の第一次的價値なるものは交易經濟には存在せざるを以てなり。」（同五五頁）次いで彼は其理を示す爲に原生的第一次的價値と派生的第二次的價値との區別を詳細に說明せり。

「ボエ氏は曰く、財の主觀的交換價値は之と交換し得可き財の使用價値によりて定り、從つて又其限界效用によりて定ると。即交換價値の大小は既に代價の與へられたるものと前提して始めて決定され得るものなり。然るに彼は第一次的なる使用價値と第二次的なる主觀的交換價値との間に於ける根本的の區別を認めずして、均しく兩者を採つて以て代價理論の基礎としたるものにして、而も主觀的交換價値を代價の說明要素とするに際して、當然既に與へられたるものと前提すべき代價をば與へられたるものと前提せざるなり。（同五九頁）要するに彼は生產物の高く賣れる理由を求めずして、却て生產財が廉く買はれるの理由を求めたり。即費用によりて定る所の生產財の代價と云ふ既知のものより出發して、生產物の代價と云ふ未知のものに向つて進むの策を採らずして、逆に既に利子を含める高き生產物の代價と云ふ未知のものより出發して之より生產財の代價を導き出さんとす。故に氏の研究は始めより逆の方向を採れるなり。」（同七一頁）即 Otto Conrad の意見に從へば、Böhm-Bawerk は既知より未知へ進むと云ふ順路を採らずして未知より既知に向ふと云ふ逆

路に依りしものにして、非難を受く可きは理の當然なり。然れども Conrad は彼の代價の關係を述ぶるに當りて「需要の總量と既成財の總量とが勞銀の高を決定するものにして、而して個々の生產物の代價は――自由競爭の完全に行はるゝ限り――費用の高即生產に費す可き勞銀の高によりて定る」と稱せり。兩者の依て以て基礎となす所の價値論の異る以上、一方の攻擊を惹起すは當然にして、其費用價値說と限界效用價値說との關係に付ては十分別個の研究に價する問題なりとす。

同種同量の財の比較より生ずる Time discount theory に對して加へたる Clark の非難は、Böhm-Bawerk 自身の意見に從へば、彼の受く可き筋合ひのものならずして Abstinence theorist に向けらるべきものと爲されたるのみならず、其は亦彼によりて反駁をさへ蒙りたり。然るに Böhm-Bawerk は Clark が一八九九年に著はしたる Distribution of Wealth に對しては更に多くの批判と非難とを加へ、而して其 true capital と Capital-goods とを區別せんとする思想に基く彼の利子起源論に攻擊を加へたり。

Clark の分配論の一般的特色たる命題は、總ての價値賃銀及利子が彼等の普通の標準に達する所の社會の靜的狀態に於ては、生產の各要素或は要因は、其が生產物の方面に於て造り出したる丈の所得を其所有者に齎らすものなりと云ふことなり。即 Products と Shares とは一致するなり。然るに Clark によれば生產の要因は勞働資本（土地を含む）及勞働より分岐せる企業家の職能の三なり。而して自由競爭は、勞働の造る所のものを勞働者に、資本が造る所のものを資本家に、而して指揮する職能が造る所のものを企業家に與ふるの傾きあるものなり。而して彼は此分配問題解決の爲に轉嫁の理論（the theory of imputation）を應用するものにして、其は「生產要素の何れかの最後の單位に歸因すべき生產物の增加即最後の增加（final increment）は各々の單位（unit）に歸せらるべき所のものゝ標準なり」と云ふ結論を生ずるなり。特殊の生產力とは最後の生產力（final productivity）のことなり。斯る學說に對して Böhm-Bawerk は批判を加へて述ぶ「Clark 敎授は此轉嫁の一般理論を資本にも適用するなり。彼は、何等 Abstinence の思想の手段に依らず、或は變化する生產期間の影響に基く余の學說の如き何等かの他の學說に依ることなくして、資本の問題を直接に且遺漏なく解決することは此理論に基きてのみ可能なりと信ぜるなり。資本は生產力あり且額に於て制限せらるゝと云ふ單一の前提は、資本が其所有者に利子として生ずる特別の金額の純所得を產出すと云ふ事實の、直接且完全の說明を與ふるに十分役立つものなり。

此生產力說は他の同種類の說と同じ點に於て又同じ理由に基きて、余にとりては失敗と思はるゝなり。其は資本の生產力に眞の利子の原因を見出さんが爲に理論的失錯を爲せるなり。其は完全なる轉嫁理論を活用すと雖、際どき點に於て轉嫁理論に於ける一連鎖を暗默の中に看過せるなり。而して實に眞に利子問題が出現し解決せらるべき所の連鎖を看過せるなり。」（Böhm-Bawerk, "Capital & Interest once more," Quar. Jour. of Eco., Vol. XXI, pp. 247-249）即 Böhm-Bawerk は Clark の生產力說を彼が Capital & Interest Book II に於て述べたる理由に依りて排斥したるが、更に Clark が其 Distribution of Wealth, p. 398 に於て「各種の財の產出高の或部分は資本に遡り得るなり從つて abstinence と

稱する犧牲に遡り得るなり」と述べしよりして、彼は Clark 教授は生産力說を採れるにも拘らず尙ほ「Abstinence Theory として知らるゝ利子說明の方法に與するの傾向あり」とて非難するに至れり。彼は語を次いで曰く「勿論彼は、abstinence を經濟的美點と考へ若しくは其理由に基きて利子を是認するを必要と考へざることは、明かに述べ居るなり。又生産物を造り出す資本の力が利子の基礎なることに重きを置けるなり。然るに彼は abstinence は新資本の創造にのみ關係するものにして、全く動的現象なるを信せる旨を極めて明瞭に述べたり。而して彼の資本理論は節慾なる靜的狀態に關して發展せしめられたるを以て、總て之等の事は、Clark 教授が、靜的現象としての利子の理論的說明を、節慾の動的現象の上に基かしめざることを示すものと思はるゝなり。然るに生産物の一部分を節慾と稱する犧牲に歸し、又 Giddings 教授の或說明を贊成して引用せる章句によりて、Clark 教授の見解は余には一層不明瞭となれるに至れり。Giddings 教授は資本の生産費を節慾の中に求めんとはせず、併し後の疲勞せる勞働時間の增加せる倦怠の中に求めんとするが如く思はるゝなり。其れ故余は二つの一般的論評を下すを以て滿足せんと欲す。

（一）節慾說は或前提に基くものにして Clark 教授の生産力說と撞着なからしめらるゝを得ざる或結果を導くものなり。

（二）節慾說其ものは利子の意義の探究者の通過せざる可らざる危險なる狹路を有するものなり。」(Böhm-Bawerk, op. cit.—pp. 275-277) 而して彼の意見に從へば、Clark は其點に於て彼の根本思想との連鎖を失へるものなりと。

兎も角 Böhm-Bawerk は Clark の利子の生産力說を排斥せることは前述の如し。其は亦 Böhm-Bawerk が G. Walker の駁論に答へし句の中に殊に明かなり。即 G. Walker の非難は、彼の數多の原因の一に過ぎざる且最も重要なるものには非る事實を、彼の利子學說の唯一の且主要なる原因として强ふるものにして、「Walker が資本の生産力は利子の起源に何等影響を及ぼさず」と云ふ意見を余に歸するは誤りなり。寧ろ余に歸すべきは資本の生産力を其れ自身利子の十分なる原因として認めずと云ふことなり」と言へり。

されば、生産物を創造する資本の力が利子の基礎なりと確信せる Clark とは、論爭を惹起するは宜なりと言はざるを得ず。而して彼等の利子論爭は彼等の資本に關する見解の一致を見ざる間は永遠に解決の道に就かずして、後進の幾多の利子研究者をして再思參考而も尙ほ汲みて盡きざる興味の泉源として殘らんのみ。(完)

## 新刊紹介

### 「無産階級獨裁ヒソ并エト制度」

Karl Diehl, Die Diktatur des Proletariats und das Rätesystem, Jena 1920.

勞農露西亞政府の代表者は、ボルシェヰズムがマルクス主義の最も正しき適用なることを主張し、殊にレエニンの著作が甚だ多くの紙幅をマルクス言說引用の爲めに割いて居る事は、既に人の知るところである。而して獨り「共産黨宣言」(一八四八年)及び其時代の他の著作のみならず、其後殆ど三十年を經て、マルクスの Sturm und Drang 時代は既に遙かに過ぎたと思はれる一八七五年に於ても、彼が猶ほ「資本主義社會と共産主義社會との間には、一より他への革命的變形の時期が横はる。これに適應するものは又